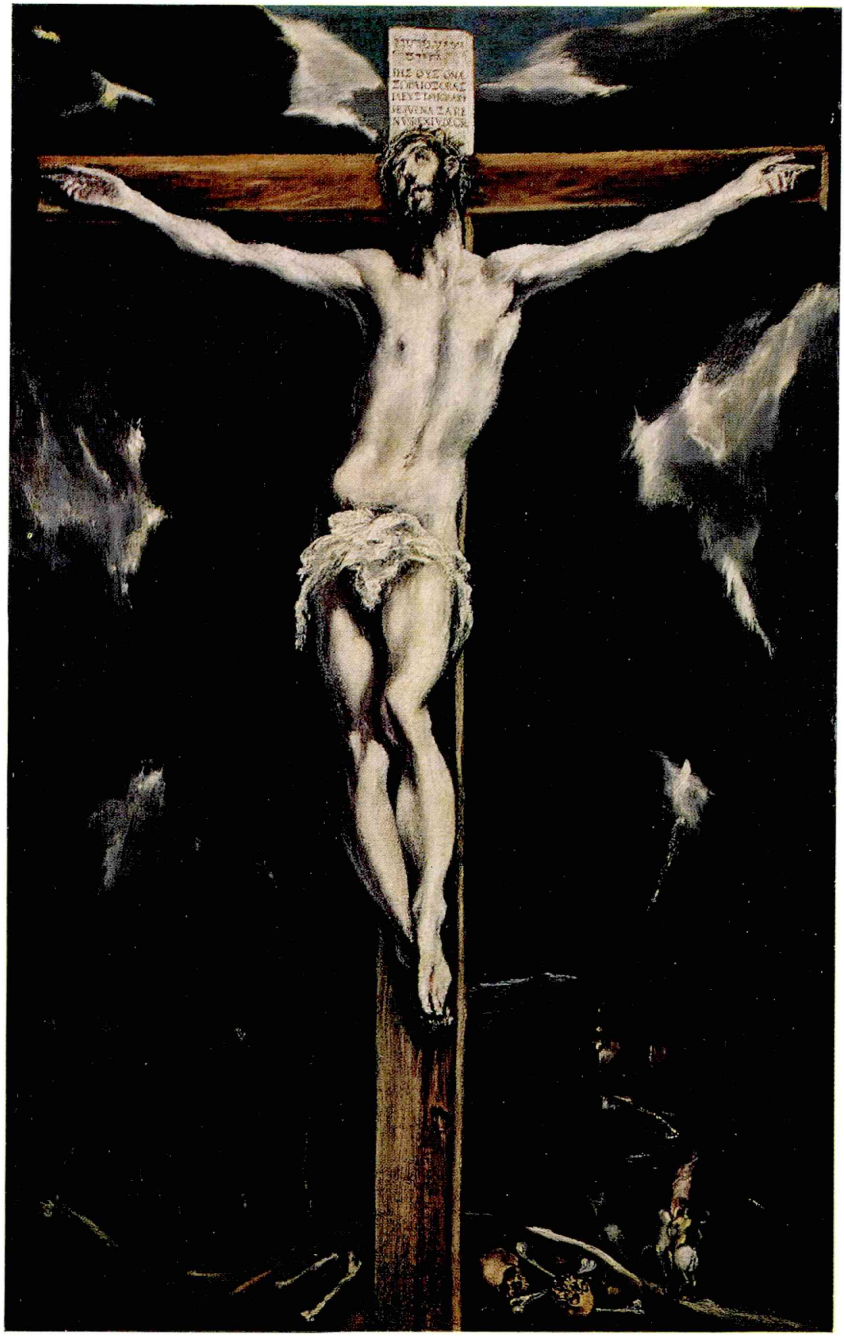

新収作品：エル・グレコ《十字架のキリスト》

昭和49年度新収作品について

山田　智三郎

国立西洋美術館は，昭和49年度の購入予算で，絵画2点と版画5点を購入し，三人の篤志家の御好意により，絵画4点，素描2点，彫刻2点，工芸1点の寄贈を受けた。各作品の題名およびデータについては，別項新収作品目録にゆずって，ここには，主な新収作品について簡単な報告をし，加えて，寄贈者への感謝の辞を述べることにしたい。

購入絵画のうちの1点は，エル・グレコ（1541～1614）の《十字架のキリスト》である。ゴルゴタの丘の上の十字架上のキリストを，「ひるの12時ごろ，日，光をうしない，地の上あまねく暗く」なった（マタイ伝，マルコ伝，ルカ伝），神秘な閃光に処々の白雲を照し出された劇的な暗い空を背景に，前面に大きく描き，丘の下に見える中景には騎士を，遠景には宮殿と森をほのかな光の下に描き出した絵で，エル・グレコ独特の，劇的な宗教的神秘感に満ちた傑作である。

エル・グレコは1580年頃，現在ルーヴルにある《寄進者のいる十字架のキリスト》を描いたが，その後，この寄進者像を除いた主要部分のヴァリエーションを大小何点も描いている。彼自身の筆になるものの外，研究家によってアトリエの作および弟子の手になるものと考えられるものも入れると，普通エル・グレコの作とされている《十字架のキリスト》は20点にもなる。そのうち，大部分の学者によって彼自身の作とされるものは6，7点にすぎないが，本図はそのうちの一つである。

このヴァリエーションには，大別して，トレドの町を描いたものと，本図のように，背景に風景と騎士を描いたものとがある。本図に近い構図の大作としては，セヴィラのモティラ侯所蔵のものがあり，エル・グレコのトレド時代の中期，1590年頃のものかと考えられている。別に，クリーヴランド美術館には，それよりさらに大作で，現在は下部が失われているが，もとは下部に同じような騎士が描かれていたのではないかと思われる絵があり，そうだとすれば，様式の上から言って，クリーヴランド美術館のものがまず描かれ，それに基いて，より小さなヴァリエーションが数点描かれたと考えられる。本館購入のものは，そのうち，一番晩い作品と思われる。戦前のエル・グレコ研究の権威，マイヤーをはじめとし，ウェシーを除く，すべてのエル・グレコの研究書が，本図をエル・グレコの自筆としているが（ウェシーのみがアトリエ作とする），多くは中期の後期（1590年代）と見なし，カモン・アズナルは晩年の1606～12年の作としている。大作ではないが，最盛期のエル・グレコ芸術の深みを十二分に味い得るこの作品を展示出来ることになったのは喜ばしい。

もう1点の購入絵画は，マニャスコの《羊飼のいる風景》である。これは，昨年度購入した同じ画家の《嵐の海の風景》と一対をなすもので，昨年度一対を購入する予算がなかったため，この1点を今年度購入した。この作品については，昨年度の年報（8号）に書いたので，ここでは省略させて頂く。

購入版画のうち，最も重要なものは，デューラーの鉄板エッチング《ゲッセマネの祈り》である。1515年の初刷で保存もかなり好

Nouvelles acquisitions,

par Chisaburoh F. Yamada

い。本館はデューラーの木版画としては，連作《キリストの受難》（グローセ・パッシオン）を所有しているし，銅版画（エングレーヴィング）の例としては，メランヒトンの肖像の初刷の保存の非常に好いものを前に手に入れた。それ故，デューラーのエッチングの作例としてこの版画を購入した次第である。

前述したように，本館は，デューラーの《キリストの受難》（グローセ・パッシオン）を所蔵しているが，12枚のうち，最後の「キリストの復活」図が欠けていた。この1枚が欠けていたために特別安かったので買ったのが実状である。今年度幸いに，この欠けていた「キリストの復活」（同じラテン語テキストつきの初版もの）を購入することが出来，大連作が完本となった。

御寄贈頂いた作品9点のうち，1点は16世紀初めのフランドル派の素描で，《帽子をかぶった老人の顔》を描いたもの。本館の評議員でもあった故宮本三郎画伯が，亡くなられる半年ほど前に寄贈して下さった。もと松方コレクションにあったもので，クェンティン・マサイスの作とされていた。レオナルドのグロテスクな顔の素描の影響下に描かれたかと思われるもので，しっかりした描線による，辛辣な鋭い描写は，相当の大家の手になることを示しており，マサイスの作である可能性は強い。宮本画伯は，そのヨーロッパ絵画についての深く，広い知識と鑑賞眼をもって，本館の評議員としてのみならず，購入委員としても，当館の仕事を親切に助けて下さったが，その上この優れた素描を寄贈して頂き，故画伯への感謝にみちた追憶の念に堪えない。

今年度はさらに，梅原龍三郎画伯より，ドガのパステル画1点，ルノワールの油彩画1点，ピカソの油彩画2点，キュクラデスの彫刻2点，キュクラデスの壺1点，計7点の作品を寄贈して頂いた。そのうちドガのパステル《背中を拭く女》は，ドガが好んで描いた女性の入浴情景図のなかでも特に美しいもので，彼のパステル画中の名品である。ルノワールの《横たわる浴女》は1906年の作で，彼の裸体画の好い作例を持たない本館の蒐集に，この美しい裸体画を加え得たことは非常に嬉しい。ピカソの2点はともに晩年の作であるが，ピカソの油彩作品を1点ももたぬ本館には，これも大変有難い御寄附であった。1969年の《男と女》はなかなかの力作である。キュクラデスのものは，中世末以降の作品の蒐集に全力をあげている本館の現状には異質のようにも見えるが，本館の蒐集は，将来は西洋美術全体を示す蒐集にまで拡張すべきもの故，その先取りをして御寄贈を頂いた次第である。市場価格にすれば合計五億円にも達するこれらの美術品を進んで寄贈して下さった梅原画伯の公共のためにつくされようとする御篤志には感激の外はない。本館を代表して心からの御礼を申上げてこの報告を終る。